

---

# Chemical Wood

夏奈悠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Chemical Wood

### 【ISBN】

N4334Y

### 【作者名】

夏奈悠

### 【あらすじ】

第三次世界大戦が終戦して、5年がたった。

人間は今だに肉食型植物『ケミカルウッド』との攻防戦を繰り広げている。ある一人の少年 橘 道理は日本最後の砦、機械都市・空蝉で迷い込んだケミカルウッドの討伐をしている。しかし、ケミカルウッドの研究をしている道理の父親はケミカルウッドの“眞実”を知ってしまう・・・しかも、空蝉に世界に数匹しかいないランクSのケミカルウッドが侵入して・・・

## 近未来の出来事（前書き）

まずは序章から・・・

楽しんで下さい。

## 近未来の出来事

2050年の日本、いや、正確に言えば世界の支配者は人間ではなくなつた。

宇宙人？魚人？地底人などなど、疑問は諸々あるだろう。だが、まずは順序を通して説明しよう。

まず、核兵器が各国で乱発されていた第三次世界大戦が終戦して一ヶ月。

日本は、10ヶ国と『世界交戦国再高論同盟』と言ひ同盟を結んだ。

こうして、誰もが日本に平和が訪れて、心の底で安堵をしていた。しかし、ある時植物が人間に食らいついた。

その植物は後に『始まりの原点』『オリジンケミカル』と呼ばれる。

そのオリジンケミカルは恐るべき速度で繁殖し、たちまち世界の支配者は人間から植物へと姿を変えた。

ある学者は、突然変異と考え。ある学者は、地球外生命体と考える。

真相は今だ謎のまま、今日も人類は肉食型植物『ケミカルウッド』との攻防戦を繰り広げている。

『橘、前方50メートル先にランクBのケミカルウッドがいる。直ちに討伐せよ!』

通信機越しの親友・成城盛城の声が平然と聴こえてくる。  
たちはなじゅうじょう

「OK。こちら橋道理。ランクBケミカルウッドの討伐を開始します」

この二二二マンスを変更ながら、道理は脇はかけでいた靴から、黒刀を抜き出す。

機械都市・“空蝉”『うつせみ』は、肉食型植物『ケミカルウッド』と攻防戦を繰り広げる日本最後の砦。

全長2.5メートル程のケミカルウッドは触手をうねらせ、喧嘩を上げる。そのケミカルウッドは、4つの触手につぼみの状態で顔を隠している。

「全くない」と言つたが、一品が全くと言つて程なし  
しく創造できなかつたのかよ・・・」

「イシヤツ、ネケタイ、セリタリ、通学鞄という、バリバリ高校生の帰宅途中の格好の道理は少しも動きずらい仕草を見せずに、ケミカルウッドに勇敢にたちむかつて行く。

夙坂！あいの特徴は？」

『道理は通信機のスピーカーに向かって問し掛ける  
「ちょっと待つてろ・・・』

通信機起しにガタガタとノソーンのキー ホートを打一音が聴こえてくる。

目の前のアミガリ「」が、この角三を同時に捕つかざす。

「あつぶねえ——！」

道理はそれを察知したかの様に一足先に身体を後ろに反らす。そ

の弾みで触手が鉄塔を薙ぎ倒し、足場を崩れる。

『橘。“民間陸軍”的情報組の本部がケミカルウッドに破壊されていて、情報が経由できないぞ！』

日本民間陸軍討伐組 略して“民間陸軍”はケミカルウッドを倒すため、機械都市の民間が召集されて、その中でも選りすぐりの面々がこの民間陸軍なのだ。民間陸軍にも色々役割がある。討伐組、情報組、研究組、医療組、防衛組の5つの種類がある。一言で言えば、エリートの中のエリート。

道理は足場が崩れたことで、通信機を落としてしまう。

『おい・・・橘、聴こえてるか？返事しろ！…おい橘、橘 道理！』

道理は通信機を落とした事には気が付いておらず、成城の声は全く無意味となっていた。

「生意気な植物め・・・たかがランクBなつたばかりで・・・」

ケミカルウッドにもランクというものが存在し、下からランクD、C、B、Aとなっている。だが、人間もAランクのケミカルウッドを機械都市に素直に入れる程馬鹿ではないので、縦幅60メートル、太さ50メートルの壁に機械都市を囲み、ケミカルウッドが侵入できなくなっている。

「てか、成城！さつさと情報よこせよ！」

残念なことに道理の言葉は成城には届かず、虚空中に焼き消された。

「シシャヤヤヤアアアアアアアア！」

ケミカルウッドは道理の黒刀を見て、つぼみが開き威嚇をする。

「くそッ！通信機を落としちまった・・・」

道理は通信機を落としたことで取り乱したが、すぐに冷静になり、黒刀・黒椿を鞘にしまう。刀はケミカルウッドを威嚇するからだろうか、道理は瞳を閉じて小さな息を吐ぐ。

「このケミカルウッドは、つぼみを開じている・・・攻撃時はつぼみが開き、触手を振りかざす。じゃあ、このケミカルウッドの弱点はどこだ？」

その時、目の前のケミカルウッドが触手を振りかざす。

道理はそれを予知したかのようにその場に俯せになり、攻撃を避ける。

「まあまあ、落ち着きたまえ・・・ケミカルウッド君。しかし、君は単純明確純情な性格だな。おかげで分かりやすい」

いきなりケミカルウッドに向けて、道理は敬語を使い、鞘にしまつてある黒椿の柄を握りしめる。

周りの音が消え、道理とケミカルウッドに沈黙が生まれる。ケミカルウッドも道理の様子を不思議がり間合いをとる。

そこからつぼみを開き、ケミカルウッドが触手を道理に振りかざす。

音なき場所に敵意はない・・・

黒椿流・居合

「錯消夢幻！！」

ケミカルウッドの触手が道理に届く直前に、道理が恐るべき速度で跳躍し、開いたつぼみのド真ん中を切り裂く。

切り裂かれたケミカルウッドは4本の触手を地面に垂らす。

「あー、聴こえるか成城？こちら橘 道理。ランクBのケミカルウッド討伐完了。直ちに帰還する・・・」

落とした通信機を拾い、成城に報告する。

その時、切り裂かれたケミカルウッドが再び触手をうねらせ、奇声をあげる。そして、道理に向けて二つの触手を振りかざす。

ケミカルウッドは生命力は半端じゃないが、弱点を突かれたら大抵のケミカルウッドは死んでしまう。だが、今回は切り裂くポイントが少しズレていたらしい。

「な・・・」

突然の不意打ちに身体が硬直する道理。「死ぬ・・・」と、道理が目を閉じ、悟る。

しかし、触手は道理の頭の田の前まできていたのだが、道理には直撃しなかつた。

そのかわり、聞き慣れた一挺拳銃の銃声が周りに木霊するだけ・。

道理は恐る恐る田を開けると、そこには一人の少女が仁王立ちをして道理を見下ろしている。

「な、難波！？なんで・・・」

難波と呼ばれたセミロングの少女は道理に近、耳元で怒鳴る。「なんでもかんでもないわよ！－全く、なんでも一人で特攻するからこんな事態になるのよ」

彼女の名は、難波 南。なんばみなみ道理と同じ日本民間陸軍討伐組の討伐組一員。

本人は医療組を志願していたが、討伐実施訓練の成績がトップクラスだったため、半強制的に討伐組に入れられた。

基本は一挺拳銃を得意とする難波だが、その他にも中距離、遠距離の銃を完全にマスターした。という都市伝説級の成績を持つている。

「成城君が『橘と通信が途中で切れた』て、言つてたから心配して駆け付けてやつたのに・・・」

「仕方ないだろ・・・通信機を落としちまつたんだから」

道理が反論すると、難波は不適な笑みを浮かばせる。

「へー、わざわざ助けてあげたのに礼も言わず文句ばっか言つんだね。いいご身分だこと・・・」

逆にその不適な笑みが道理の表情を凍りつかせる。

「僕が悪かったです・・・難波さん」

すぐさま土下座をして、プライドの維持と死亡フラグを回避する。

「そうそう、いつもそんな風に素直ならしいのになあ～」

難波は満足したように笑みを浮かべ、一挺拳銃をしまう。

「他に空蝉に侵入したケミカルウッドは？」

それを見た道理はホッとしたらしく、黒椿を鞘にしまい腰にかけ

る。

「もう一体は私が倒した。ランクBだったから余裕よ。ぶい」  
可愛らしい手で丶サインを作る。難波は“余裕”を強調して道理  
に白懲げに言ひ。

「ああ、そうかい。君は俺より強いからもう何も言わねえよ。そ  
ういや、成城に用事あるから、情報組支部と一緒に行くか？」  
「うん。いいよ、私も討伐報告しなくちゃいけないし」

難波は首を大きく縦に振り、道理と並んで歩き出す。

## 日本民間陸軍討伐組（後書き）

いかがでしたでしょうか、Chemical Woodを一覧になつて。書き直し書き直しの連続で投稿時間が延びてしまいました。まあ、基本一週間に一回ぐらいのペースで投稿していきたいと思います。

では、また会う日まで・・・

「「お邪魔します」」

道理と難波は声を揃えて、民間陸軍情報組支部室の扉を開ける。そこには、何十台と並び、重ねられたデスクパソコンが置かれていた。

テレビには、ケミカルウッドが空蝉に侵入したことをニュースで取り上げていた。

その真ん中ぽつんと、一人だけ座ってパソコンと向き合っている眼鏡少年がいる。

「おー、お疲れ〜」

眼鏡少年は素っ気なく返事をし、素っ気なく左手を上げる。

この眼鏡少年こそが成城 盛城、情報組一の情報収集とパソコン技術を持っている。さらに道理や難波が通っている成城学園の理事長の孫という権力の持ち主。さらに並外れの計算力、推理力の持ち主。やはり、眼鏡をかけると頭が良くなるのだろうか。と道理にとつてのこの頃の悩みの一つになっている。

それを察したように成城は椅子を回転させて道理の方を向き、眼鏡のブリッジを中指で押し上げる。

「ランクBケミカルウッド討伐!! 苦労様。どうだつた? 戦つて見て?」

「別に何も・・・いつも通り普通のケミカルウッドだつたよ」

まあ、正確に訳せば「普通の」というのは、道理や成城から考えると、難波の普通=難波にとつては普通だけど、俺達にとつては強い、となってしまう。

「大体、なんでケミカルウッドが二体も空蝉に侵入してくるのよ・・・どこか抜け道があるんじゃない?」

「まあ、その考えも一理あるな、けど今、防衛組と情報組が全面出動で調査に乗り上げているんだ」

「結果は？」

「まだ、わかんないらしい……けど、一人の少女の目撃情報があるんだ」

「目撃情報？」

道理と難波が同時に首を傾げる。

「昨日、コンクリートの隙間にたんぽぼが生えていたらしく、次日にそのたんぽぼを見に行つたら、たんぽぼがなく、その帰りにケミカルウッドを見かけてしまった。ということでしたな」

「……超どうでもいい話だな」

「ああ、電話で30分以上も聞かされた」

成城は会話を終えると、またパソコンに向き合いカタカタと音をたててパソコンを操作する。

「今回のケミカルウッドの死体はどこに持つて行かれるんだ？」

「無論、民間陸軍の研究組に決まってるだろう」

成城はパソコンを操作しながら、答える。

「そのケミカルウッド、生命力が半端なかつたぞ」

その言葉に疑問と好奇心を抱いたのか、また、椅子を回転させて眼鏡のブリッジを押し上げる。

「と、言つと？」

「いや、切り所が悪かつたつて訳じやねえんだけど、そのケミカルウッドの弱点であつた花の部分を切り裂かれて、倒れ込んだんだが、何故か起き上がつたんだ」

「そこを私が一挺拳銃で倒したの」

難波が補正する。

「・・・・・」

成城がしばし考え、口を開ける。

「ここで一つ仮説立てよう。まず、そのケミカルウッドは特種ケミカルだ」

特種ケミカル　　特種細胞ケミカルウッド。

普通のケミカルウッドとは、異なる能力を持つケミカルウッド。

現在確認されている中でも移動速度が速い、跳躍力が高い、攻撃技が独特、などなどが特種細胞ケミカルウッドの定義になつていて。

「恐らく、生命力が極端に持続することに進化したケミカルウッドだろう。そのケミカルウッドがランクAだったら、空蝉は一部のエリアは壊滅しかけていだらうな」

ランクAのケミカルウッドは一体倒すのに、通常の民間陸軍の討伐組が百人はいなければ倒せない。

「ああ！わかつたわかつた。別にそんなつまんないことを聞きに来たんじゃないの。討伐報告しに来たのよ」

難波は椅子に座つて足をばたつかせる。

「そうそう難波、今回は1、1だぞ」

「はあアホ？どう見ても私が貴方のターゲットを倒したわ。だから、

貴方の報酬は私の物。私の報酬は私の物」

「はつ！ジャイ〇ンみたいに言つてんじやねえよ。ただ、とどめを刺しだだけだろ！」

「もう2055年なのによくそんなアニメ知つてんな・・・」

「成城は黙つて！！！」

成城が静止させられる。

あの第三次世界大戦で日本の文化はほとんどが壊滅状態に陥つていて、この頃はようやく20年代前半の生活を取り戻している。

「ああ、わかつた。難波の討伐ポイント上げとくわ」

成城はうんざりとした顔で口を挟む。

「おおい！成城くーん！？何言つちやつてんの？そこは僕に味方するんじゃないのかな・・・」

「いや、難波に媚び売つた方が・・・後々役に立つし

道理に胸倉を掴まれるが成城は目を逸らし、横目で難波を見る。

道理は、

「Jの裏切り者～～！！」

と、声を枯らして涙を拭う。

「けど、実際に倒したのは私。何か異論でもお有りですか橋道理君？」まあ、そのチキンマイハートで何ができるのかな？」

豪快な嫌味つたらしの言葉を吐く。そして、満面不適な勝利の笑みを道理へ向けて放つ。

道理はその笑みに背筋がゾツとして慌て床に座る。

「僕が悪かったです……難波さん」

道理は土下座をして再びプライドの維持と死亡フラグを回避する。「そうそう、さすが物分かりがいい。というか、話変わるけど、返事まだ？」

道理はギクリッと肩を震えさせる。

「返事……？」

成城がこれまた疑問と好奇心満載の瞳で道理と難波を見返す。

「いやいや、話変わりすぎだろ……」

道理はそう言いつと、支部室の冷蔵庫から缶ジュークを取り出し、蓋を開ける。

「だつて、告白してから一週間もたつんだよ。有り得ない……」

「ああ、難波に愛の告白に対して橘が一週間も女の子を待たせてるのか……ふつ、最悪だな！！」

成城は道理に軽蔑の眼差しを送る。

「いやいや、なんか盛大に誤解をしているようだな成城盛城」

道理がその言葉に対してもう一度冷静に対処するが、難波は慌てて、

「ちよつ！せ、成城君、何言つてんのー？」、「じいつと？」のもやしみたいな奴ど？有り得ない有り得ない……絶対ない……引くわ～……」

と、あからさまに動搖して否定する。

それと引き換えにさつきまで冷静だった道理の感情が奈落の底へ墮ちていく。

「な、なあ成城……俺つてそんな漢として魅力ないか……？ああ、漢つて男子の“男”じゃなく、漢字の“漢”だぞ……」相変わらず、打たれ弱いと言つのか、チキンマイハートと言いつの

が、芯が脆いと言つのか・・・結論を言つと、『道理は弱い』

成城は道理にそつと手を置き、言つ。

「おい・・・戻つて来い！大丈夫だ、橘は魅力たっぷりだ。運動神経抜群、それに秀才、まさに才能の無駄遣い！」

まさに、を強調して満面の笑みで言葉を漏らす。

「最後の一言はスルーしておこう。立ち直れなくなるから・・・しかも、顔とか褒めてねえー。」

それより難波、俺は『その二つの名の者』『ザ・パースン・オブ・レジエンド』には参加しねえーぞ』

『その二つの名の者』ザ・パースン・オブ・レジエンド・・・成城学園の恒例行事の民間陸軍討伐実技訓練行事。

おおまかには、二人一組のチームになり、実技訓練用のランクB以下のケミカルウッドをいち早く倒し、攻撃の仕方、攻撃の対処方などの評価で高得点を取ったチームが優勝。となっている。

優勝景品は毎年違うらしいが、その分毎年豪華な代物らしい。

「えー、いいじゃん！じゃあ、私が遠距離武器でやればいいんでしょ」

「ダメだ、そしたら余計俺が目立たない・・・」

そう言つと、道理は缶ジュースに口をつけ、飲む。

「あー、私も飲む！」

難波が道理から飲みかけの缶ジュースを奪い取り、口をつける。

「おい、俺少ししか飲んでねえーぞ」

そう言つと、二人の缶ジュース争奪戦の幕が上がる。

この二人、傍から見ると、新婚のバカップルみたいだが、本人達はそんな一切自覚してはいない。

そんな光景を呆然と見ていた成城は目を細めて一人に問い合わせる。

「もしかして、デート帰り？」

そんな微笑ましい彼らを夕陽が照らしていた・・・

## 情報組支部室（後書き）

お久しぶりです・・・  
よくよく考えてみると、“成城  
盛城”って遊び心でつけた名前を  
普通に投稿しちゃった・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4334y/>

---

Chemical Wood

2011年11月18日03時15分発行